

【月刊】

URL: http://www7b.biglobe.ne.jp/~catch_peace2008/

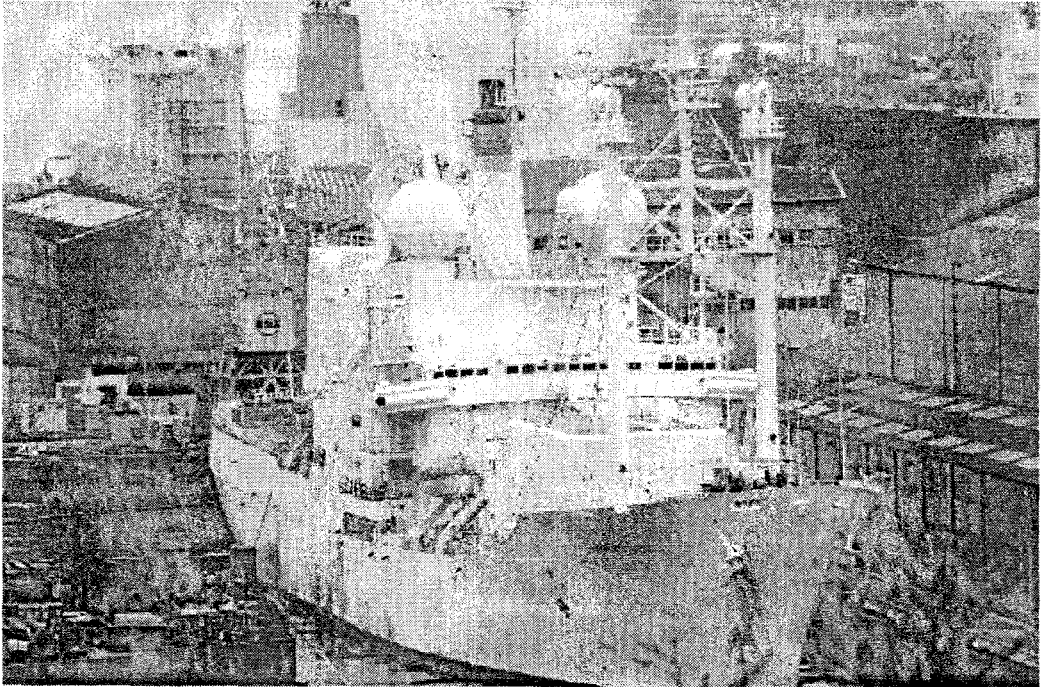
キャッチピース

今月の一枚



No. **163**

通巻 240 号
2009/05/20



佐世保に入港した米海軍弾道ミサイル観測艦オブザーベーション・アイランド
(09/5/20、リムピース提供)

この号の内容

- 北朝鮮核実験は誰をよるこぼせているのか? … 田巻 一彦
- 横須賀「市民の力で市政をつくる会」発足
- オキナワから トウキョウから 46 … 太田 武二
- オキナワの基地の一ヶ月 … 皆川みずゑ

編集発行人 ●脱軍備ネットワーク・キャッチピース

●維持会員 (月額) 個人 1口 1,000円 団体 1口 2,000円 ●参加会員 (月額) 個人 1口 500円 団体 1口 1,000円

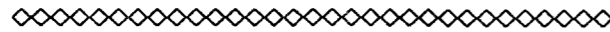
●通信会員 (年額) 1口 3,000円

(会費には本誌購読料が含まれます)

北朝鮮核実験は 誰を よろこばせているのか？

－「非難と制裁」が「エスカレーション」を呼ぶ負の連鎖を断ち切ろう

田 巻 一 彦 (キャッチピース)



◆とんでもないことをしてくれた

5月25日の午前、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)が06年10月に次ぐ2回目の核実験を強行したというニュースを聞いた時に抱いたのは、「とんでもないことをしてくれた」という想いだった。以下は北朝鮮の発表である。

「われわれの科学者、技術者たちの要求に従って、共和国の自衛的核抑止力をあらゆる面から強化するための措置の一環として、主体98年(2009年)5月25日、2回目の地下核実験を成功裏に実施した。

今回の核実験は、爆発力と操縦技術において新たな高い段階で安全に実施し、実験の結果、核兵器の威力をさらに高め、核技術を絶え間なく発展させることのできる科学技術上の問題を円滑に解決することになった。今回の核実験の成功は、「強盛大国」の大門を開くための新しい革命的大高揚の炎を激しく燃え上がらせ、150日戦闘に丸丸となつて立ち上がった、わが軍隊と人民を大きく鼓舞している。核実験は、先軍(注：軍事優先)の威力で国と民族の自主権と社会主義を守り、朝鮮半島と周辺地域の平和と安全保障に貢献することになるであろう。」(5月25日「朝鮮中央通信」、訳文は『朝日』)

爆発の規模は、当初TNT換算で10～20キロトンとの報道も流れたが、その後の地震波などの分析から数キロトンの範囲だろうとの見方に落ち着きつつある。いずれにせよ、06年の第1回実験が推定1キロトン以下であったことを思えば、威力は相当増大されていることは間違いない。ピョンヤンでは大きな祝賀集会が開かれていると伝えられている。

このニュースを聞いたとき、筆者は外務省でICNND(核不拡散・核軍縮に関する国際委員会)共同議長の小川順子・元外相と市民との意見交換会に出席していた。もちろん核実験のニュースは終了後に聞いたのだが、「北東アジアの非核兵器地帯化が核兵器のない世界への不可欠の一部。だから日本政府が一歩も二歩も踏み込んで非核のイニシアティブを取らざるを得ないようなく勧告」を、委員会に期待する」と発言したばかりの筆者は、文字通り頭から冷や水をぶっかけられたような想いになった。

◆勇み立つ日本の軍拡・日米安保強化派

世界には非難の声がまきおこった。来週(6月1日～)にも日米韓が起草した国連安保理決議が採択されようとしている。そこには北朝鮮への「最大限の言葉」での非難と新たな制裁措置＝北朝鮮に向かう船舶への「臨検」を含む、が含まれる可能性すらある(中国やロシアは実力行動には反対しているので実際にどのような決議になるかはわからない。06年の「安保理決議1718」(いわゆる「核実験制裁決議」を公然と破る行動に出た北朝鮮は非難されてしかるべきだ。しかしそれが即制裁強化の理由になるかといえば、筆者はそうは思わない。なぜなら、今までの経過が証明しているように、「制裁強化」は北朝鮮軍部の強硬派を勇気づけ、さらなるエスカレーションを招く可能性の方が高いからだ。北朝鮮が長距離弾道ミサイルの実験準備をしているとの情報すら流されている。

日本政界では危険きわまりない議論が再び活性化した。5月27日、自民党国防部会・防衛政策検討小委員会は、敵基地攻撃能力の保有や早期警戒衛星の研究開発を今年末に改訂される「防衛計画の大綱」(2010年～14年)に盛り込むべしとする提言に基本合意した。もちろん、この提言は今回の核実験の前から準備されていた。提案されたのは24日だ。しかし、25日の核実験が、専守防衛政策を大きく揺るがすこの提案の追い風になったことは間違いない。26日、敵基地攻撃は「法理的には可能」と、これを後押しするかのような見解を記者に述べた。

「敵基地攻撃能力論」は何も新しい話ではない。60年代からその議論はあったが、憲法平和主義にもとづく「専守防衛政策」によって具体的な検討は封じ込められてきた。自民党国防族の積年のフラストレーションが噴出するきっかけは、常に北朝鮮の核・ミサイル実験だった。背後には「核武装肯定」という究極の論理までが隠されている。

このような議論はその都度次のように「火消し」されてきた。「日本には元来、防衛のために対基地攻撃や核武装する権利はあるが憲法上それはできないので、そのいずれをも米国に委ねている。」今回の騒ぎもつまるどころ、ミサイル防衛を含む日米安保の強化という論理に吸い取られてゆき、今年末予定の「防衛計画の大綱」でそれは再確認されるであろう。

しかし、北朝鮮がミサイルや核兵器を開発するのに、他でもない米国の通常戦力・核戦力の脅威から自国の存立を守るという動機であることだ。言いかえれば、日本が北朝鮮の核やミサイルの脅威から自由になり安心を得るために「日米安保」強化すれば、北朝鮮の脅威もそれに応じて増大するということである。いわゆる安全保障の「負のスパイラル」である。

◆「破綻」したのは何か？ 活路は何か？

4月5日のSLV発射への安保理を巻き込んだ日米韓の非難と追加制裁への反発と、オバマ政権を「直接交渉」に引きずり出したいという北朝鮮の計算(前号参照)が、核実験の背景にある。これは北朝鮮の4月6日の声明で予告されたことであった。(次ページのコラムに抜粋)

6か国協議が追求してきた対話路線はもはや破綻したという論調がメディアでも流されている。しかし、もう少しながい時間の物差しをあててこの10数年の動きを追えば、実は破綻しているのは日米が「対話」の影で推し進めて来た、前記のような「力の政策」であったことは明らかである。

対基地攻撃能力もミサイル防衛も役に立たない。北東アジアを非核兵器地帯化し、協調的安全保障枠組みを通して「共通の安全保障」を追求すること意外に本質的な解決策はない。

簡単なことではない。だが、挑戦する価値のある仕事だ。日本の市民は韓国の市民と連帯して、今こそ声をあげよう。(5月30日記)

(たまき かずひこ)

北朝鮮外相声明 (09年4月14日)

★「核兵器・核実験モニター」326号(09年4月15日)より。原文は英語版。

(前略)

朝鮮民主主義人民共和国外相は、支配的な状況に対する当面の対処として次のとおり宣言する:

第1に、我が国は、我が国の主権を、悪意をもって踏みにじり、朝鮮人民の尊厳を傷つけた国連安全保障理事会の不正な行動を断固として拒絶し、非難する。

我が国は、高圧的な行動の道具に成り下がった国連安保理事会の恣意的な行為ではなく、国際社会の総意を反映する宇宙条約を含む国際法にもとづき、宇宙を利用する独立の権利を行使しつづけるであろう。

第2に、我が国が出席してきた6か国協議はもはや必要性を失った。

朝鮮半島の非核化のための「9月19日共同声明」において表明された主権と平等の尊重は、6か国協議の生命であり精神の基礎である。

6か国協議は、その当事者たちが国連安保理の名のもとでこの精神を否定し、開始当初から協議を露骨に妨害し続けてきた日本が、衛星発射を理由に我が国に制裁を課した今、回復不可能なほどに存在の意味を失った。

我が国は、決して6か国協議には参加しないであろうし、我が国の主権を侵害し、我が国に武装解除と統治機構の解体を迫る舞台に成り下がった同協議のいかなる合意にも拘束されないであろう。

我が国は、主体(チュチュエ)思想に基づく原子力発電産業の構築のための発電用軽水炉の建設を実行するであろう。

第3に、我が国はあらゆる方法で、自衛のための核抑止力を強化するであろう。

平和目的の衛星すら迎撃するという意志を示した敵対勢力の軍事的威嚇の増大は、我が国に核抑止力の強化を強いるものである。

我が国は、6か国協議の合意に従い無力化した核関連施設を原状回復して正常運転に戻し、原子力発電試験プラントから取り外した使用済み核燃料棒の完全な再処理を行うための措置をとるであろう。

我が国が力によって膝を屈すると敵対勢力が考えたならば、それは重大な誤りである。

それが、独立の基本精神、先軍(ソングン)思想の意味である。我が国は、国が弱体であったがために、周辺の大国の甘言によって欺かれた挙句、朝鮮全土が日本の帝国主義者たちによって長期にわたって征服された一世紀前の不名誉な歴史を二度と繰り返さない。

我が国は、6か国協議が存在を停止し、敵対勢力によって非核化プロセスが頓挫したとしても、先軍思想の力をもって、朝鮮半島の平和と安定を守り抜くであろう。

呉東正彦さんを市長候補予定者として擁立

横須賀「市民の力で市政をつくる会」

横須賀では、原子力空母の是非を問う住民投票直接請求の運動の中から、6月28日の市長選挙での取り組みが検討されてきた。

その運動の中心的存在だった呉東弁護士を市長選に擁立しようとの声によって、「市民の力で市政をつくる会」が結成された。



呉東正彦氏

横須賀市長選

呉東弁護士が出馬へ

「市民参加で活性化図る」

原子力空母の米海軍横須賀基地配備問題に取り組んで、六月二十八日投票の横須賀市長選挙に出馬することを表明した。「市民参加で地域経済の活性化や健康・福祉施策の充実を図る」と意欲を語る呉東氏を擁立候補とする方針を打ち出した。

呉東氏は現在の鎌谷市で、東京大学法学部卒。一九九四年に同市内で法律事務所を開業し、基地問題や多重債務者問題、マンション紛争などを手掛けている。同市追浜町在住。

呉東氏は現在の鎌谷市政について「市民のために汗をかこうとしない、無気力市政」と批判。「市民と協働で地域経済による活性化、セーフティネットの充実を進める」と抱負を述べた。

(先藤 浩幸)

【3月20日付 神奈川新聞記事より】



沖縄解放の闘いの未来

「私は、5月13日は沖縄キリスト教センターで『私は、なぜ琉球・自立・独立論者になったか』という講演をしていました。翌14日は前利潔氏の待つ(?) 沖永良部島へ行きました。

15日は、シンポジウム『<琉球>から<薩摩へ~400年を考える~』の準備を手伝いました。16日は『ゆいまーる琉球の集い in 沖永良部島』で発表しました。17日は、沖縄県立博物館・美術館で、『比嘉康雄展関連講座 VOL.1 原点沖縄 写真から/写真へ』のシンポジウム中平卓馬と沖縄でコーディネーターを務めました。18日は、中平卓馬一行を見送りました。やっと、現在ゆっくり休むことができるようになりました。しかし、フラフラするほど疲れ切っています。ヨーナー、ヨーナーを忘れてはいけませんね。」

以上は、「復帰・再併合」37年の5月15日周辺の日々についての沖縄島に生活する私と同世代の活動家のメール書き込み・独り言です。

そして私も同じ時期沖縄に帰り、多くの人と会い、語り、感動と感謝の日々を過ごしました。具体的には、14日の午後の飛行機で那覇に着き、夕方から夜にかけて運動と関係ない親戚と墓参りの時

を過ごしました。その時から17日の夕方の便で東京に戻るまで72時間の短い沖縄生活でした。

私は、60歳になるまでの3分の2近くの5月15日を沖縄解放に向けての闘い表現の日として行動してきました。最初は、1972年の磯川公園での返還粉碎を掲げた沖縄青年同盟のデモでした。それから毎年「返還粉碎、沖縄解放」を掲げた沖縄青年の集会とデモに参加し続け、1983年に一坪反戦地主会・関東ブロックが結成されてからは、その行動に参加してきました。そして、1995年の少女暴行事件が転機となり、命どう宝ネットワークとして行動し、1998年からは、国際非暴力委員会が提唱した「沖縄から基地がなくなる日行動」として嘉手納基地包囲の行動に取組み、3年前までは嘉手納基地一周サンシンウオークということでサンシン練習と反基地行動を一体化し、ゆくゆくは嘉手納基地をサンシン隊で文字通り包囲し続けたいという夢に向かってきました。

その過程で、実は、私の勝手な想いで「琉球独立ファンド」「琉球独立事業計画」などの案を作って、何とか今年2009年に飛躍的な運動展開を実現したいと機会のあるごとに吹聴してきました。そのイメージとしては、「復帰」直後の「金武湾を守る会」の闘いから生まれた「海と大地と共同の力による自

立・独立」と80年代以来の一坪反戦地主運動の原点「全ての軍事基地を生活と生産の場に」を結合させたものでした。そうしているうちに嘘も百回言い続ければとか、犬も歩けば何とかという奇跡のような話で、私と同年で、還暦を迎えた日本の友人のお陰で今年の春から恩納村安富祖にある県民の森の入り口に5千坪の丘陵地を確保し、有効活用できることになったのです。独立運動を国レベルではなく、村レベルから始めるということで、まだ仮名称ではありますが、名づけて「琉球独立平和村」の創設への準備活動が今年の5・15の目的となりました。

沖縄滞在での奇跡と出会い

滞在中の時間では多くの奇跡的な出来事と出会いがありました。最初に出会ったのは、お墓の階段に寝そべっていたハブでした。14日の夕方、母親のお墓にこの2月に亡くなった兄貴の分骨をした後で、次に父方の墓を探しに行こうとして上り始めた階段の2、3段先に紐が置かれているような形で居たのが、生まれて始めて自然の中で出会ったハブだったのです。

確かに「ハブ角ジャー」といわれるような三角の顎の張った頭が左端にありました。それまで寝そべっていたハブから見れば突然の出現は、私の方であるわけで、紐のようなものだと思って私がおまま歩いていけば、ハブがびっくりして逃げたか、飛び掛ってきたかは知る由もないことで、直ぐに戻ったのは正解だったと思っています。それにしても今でも奇跡的な体験として鮮明に思い出されます。

そして翌日の辺野古でのこと。そこでも初めて貴重な体験をさせていただきました。いつものようにテント村に挨拶に行き、平和行動に参加している若者たちと離れて、籠宮神の岩場に一人で歩いていたら、お年寄りの女性が熱心にお祈りをしていたのです。しばらくお祈りが終わるのを待ってご挨拶をしたところ、辺野古に住んで30年になるというティーダの会の女性だったのです。それから約半時、遅れてきた友人たちと一緒に辺野古の神々、特に籠宮神の話聞かせてもらいました。その時に気がついたのですが、彼女の首飾りが水晶の勾玉を幾つも連ねた綺麗なもので、神人(カミンチュ)とい

われる女性が昔から伝えてきた神器のようなものでした。

これは、ヘリ基地反対協の大西さんがよく言っていることですが、辺野古の闘いの勝利は天地人の総合力によって国家権力の自然破壊と戦争準備を打ち破ってきたことを表しているのだなど実感したのです。

金城さんの大レリーフとの縁

それから名護に住んでいる友人と落ち合って、恩納村の5千坪の土地に行き、次に読谷村に行く途中で自治労や神奈川平和運動センターの平和行進に出会いましたが、今回の主目的に沿って金城さんのアトリエに直行しました。事前のアポも取らずに行ったのですが、まるで私たちが来るのを待っていたように日本山妙法寺のお坊さんと金城さんが水撒きをしながら100メートルのレリーフが置



辺野古フェンスの新しいアピール (09/5/18、辺野古通信より)

かれてある広場に居たのです。この瞬間私は、恩納村の土地に金城実さんのレリーフの常設展示場に道が開けたという感じを受けたのです。そして聞いてビックリ、1日前に金城さんとお坊さんがその土地を見に行ったというのです。

実は、沖縄に来る前に「大獅子」という金城実さんの100メートルのレリーフ作成を10年がかりで支援してきた通信があり、そこに次のような文を掲載してもらっていたのです。

「私が金城実さんに初めてにお会いしたのは、復帰直後の1973年。日本への集団就職や単身で来た沖縄青年の犯罪、自殺などが身近に起こる中で、それまでの政治闘争一本やりではなく沖縄青年の

生活に根ざした解放運動と沖縄海洋博や金武湾CTSに反対する大衆運動を目指して奈良のお寺で合宿があった時でした。その時は直接話を交わすことなく私も含めて20代の若者ばかりの中で兄貴分的な頼もしさを周辺に撒き散らしていたように記憶しています。勿論、泡盛を呑んで。(中略)その

100メートルレリーフ製作に取り掛かる頃、私はその完成時期が2009年の薩摩侵略から400年、明治政府による琉球国併合・琉球処分から130年という節目と重なり、大きな運動の核になるだろうと発言した記憶があります。」ということから始めて、独立平和村構想と金城さんの常設展示場をつなげたいと言う思いを書いたもの。要するに、私と金城さんの36年近い縁が、独立平和村と100メートルレリーフの常設展示場という形で結実するという未来像が見えた瞬間だったということです。

その翌日は、「アジアから基地をなくす国際連帯沖縄集会」「琉球処分130年・アイヌモシリ併合140年・「日本復帰」37年を問う沖縄集会」と午後から夜にかけて連続して集会に参加しました。国際連帯集会の方は、昨年と同じ時期に参加した韓国の反基地運動の仲間との交流集会ということで、丁度5月2日に上野水上音楽堂で開かれた「あんによ

ん・ハイサイ・わくわくコンサート」の大成功の熱い想いが甦ってくるような内容でした。オープニングは、知花昌一さんのサンシン演奏から始まり、金城実さんと崎原盛秀さんの講演、辺野古、高江の報告を受けて韓国からは、「民衆の声を音楽にのせて」「米軍基地と民衆の悲願」という報告がなされました。

そして夜の方は、アイヌレブルズの若者3人を中心に北のアイヌモシリが北海道に変えられてから140年と南の琉球が沖縄県という形で併合されてから130年を結びつけて未来への想像力を開放しようという集会でした。そして、翌日は午前中に、恒例の南北の塔でのイチャルバに参加し手から、前

回報告したかもしれないのですが、我喜屋さんという神人に案内されて大城喜信さんという農業コンサルタントの話を聞きに行ったのです。この方は、沖縄県農林水産部長を退職してからも「自然の力を生かす循環型農業で沖縄の未来が変わる」と農業の原点、土壌改良から農業に携わる人々の利益向上に役立つ有機農業を推進している沖縄では超有名な方で、恩納村の土地改良についての協力約束を頂いたのです。

「ビルダーバーグ会議」から考える

こうした72時間の沖縄滞在を終えて帰ってきた時に、その同じ14日から17日に、ギリシャのアテネで「ビルダーバーグ会議」が開かれていたことを知ったのです。

読者の皆さんには知っている方も多いと思いますが、このビルダー会議とは、欧米各国で影響力を持つ王室関係者・欧州の貴族や政財界・官僚の代表者などが、1954年から毎年1回、北米や欧州の各地で会合を開き、政治経済や環境問題等の多様な国際問題について討議する完全非公開の会議です。「陰のサミット」と呼ばれることもあり、出席者リスト、議題は公表され、欧米のジャーナリストも招

待されるのですが、会議での討議内容は非公開です。文字通り欧米の王族、貴族、企業家などの代表者が中心で、非欧米諸国からの出席者は少なく、日本人の出席者が確認されたことはありません。英国王立国際問題研究所や米国外交問題評議会、日米欧三極委員会とも密接な関係があるといわれています。

メンバーの中心は、デイヴィッド・ロックフェラーやキッシンジャーなどで、ネオコンと呼ばれる人々も会議の常連になっています。G8、NATO等の首脳会議の決定に影響を与えるといわれ、最終目標は欧米による世界統一権力の樹立といわれています。従って、現在のオバマ大統領・クリントン國務長官体制についても影の仕掛けがなされたということが言われているのです。実際、1991年の会議には、当時アーカンソー州知事だったビル・クリントンが招待され、その1年半後の1993年1月クリントンはアメリカ大統領に就任しました。1993年の会議にはイギリス労働党のトニー・ブレアが招待され、ブレアは会議の4年後の1997年5月にイギリス首相に就任したのです。

このビルダーバーグ会議の開催直前の4月末に、三極委員会の第40回の年次総会が、東京のど真ん中のホテルで開催されていたことをやはりインターネットの情報で知りました。それにしても、この時期にロックフェラーやキッシンジャー、ジョセフ・ナイらが日本で、三極委員会の総会をしていたとは驚き、桃木、山椒の木で、日本のマスメディアがそうした支配層の情報管理役に徹しているは明らかかなことです。というのは、その当時から始まった豚インフルエンザに関するマスコミ騒動が未だに治まる気配を見せないどころか。朝のNHKや全ての報道が、インフルエンザに何十分も使うなんておかしいとは思いませんか。

最近の私は、本当に大事な出来事が影に隠されているのではないだろうかと思っています。

その一つが、ソマリア沖での軍事行動です。兎に角、引き続いているインド洋での海上自衛隊の護衛艦二隻に加えて更に2隻が派兵されただけでなく、P3C 2機の駐留のために戦後始めてジブチ共和国と地位協定を結び、その基地の護衛のために例

の陸上自衛隊の中央即応部隊を派兵されるのです。こんな憲法違反が明白な軍事行動が、赤旗ぐらいいし報道しない中で進められている一方で、1日の相当の時間をインフルエンザの危機煽りに使っているマスコミに多くの国民がマインドコントロールされている現実が募るばかりです。

そのマスメディアのマインドコントロールの典型的な例が、5月9日の朝日新聞の一面記事を例に証明したいと思います。その大きな見出しは、「トヨタ営業赤字8500億円」となっていました。しかし、同じ日の赤旗8面記事では「トヨタ利益剰余金11.5兆円」だったのです。同じ現実にもかかわらず、こうした大きな差が、マスメディアの本性を表すものなのです。朝日の記事もよく読んでいくと、09年の営業損益が4千億円を越える赤字で、来期の見通しが8500億の赤字見通しとなっている一方、08年度は、過去最高の2兆2700億円の黒字だったと書いてあるのです。つまりここ3年間、最悪の見通しとはいっても1兆円以上の黒字で、累積利益は11.5兆円もあるということなのです。しかし、赤旗の記事では、6千人の雇用を確保しても、300万円の年収期間従業員の場合は、総額約180億円。500万円の正社員でも約300億円で、剰余金の0.15%から0.25%に過ぎないということです。

更に悪どいのは、実体経済とはかけ離れて株価が上がっていることの実態隠しが行なわれていることです。これは民間投資家を買っているのではなく、年金基金とか公的資金で株を買いきり、何とか解散総選挙での勝利のために1万円の大金に乗せる工作だということです。それと併せて小沢元代表に関する民主党批判が増していることから、いよいよ総選挙態勢に入ってきたという感じがします。その意味でこれから数年が、命どう宝ネットワークを広げ、私たち自身による平和と独立に向かったの本当の意味での正念場だと思います。そこで、有名な城山三郎氏の本で紹介されていた伊達政宗の60歳の時の名句「残軀楽しまざるべけんや」そのままに「やるっきゃない」楽しさ全快で生きましょう。

(おおた たけじ)

オキナワの基地のーヶ月

09.4.21 ~ 09.5.20

皆川みずる

飛行再開したF15戦闘機（嘉手納、08.01.15、リムピース提供）

● 4月21日

沖縄防衛局は21日、名護市役所で米軍普天間飛行場代替施設建設に伴う環境影響評価（アセスメント）の準備書に関して、名護市議や市職員に対する説明をした。その中で防衛局は、準備書に掲載された4つのヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）のうち、住宅地に最も近い南西側部分について、別の位置への移動を検討することを明らかにした。以前から市が要求しているヘリコプターの実機飛行を実施する方向で検討していることも分かった。オスプレイの配備については、日米特別行動委員会（SACO）当時、代替施設の配備を念頭にSACO最終報告直前まで米側と調整していたことが分かっているが、防衛局は「現段階では配備は想定されておらず、計画が決まっていない」と従来の説明を繰り返した。野党市議から「将来的に配備の予定はあるか」と問われると「全く否定することはできない」と配備の可能性に含みを持たせた。

● 4月23日

沖縄防衛局（真部朗局長）が23日発表した08年度の米軍嘉手納基地の騒音状況によると、最も騒音発生回数の多かった基地内の北谷町側で3万5286回を記録し、前年度に比べ2508回の減となった。うるささ指数（WECPNL = W値）は91.5（07年度は90.7）だった。宮城篤実嘉手納町長が町独自の測定結果で騒音は増加していると指摘していることには「いろいろな測定方法や測定状況があり得るので、それ自体についてはコメントは差し控えたい」と評価は避けた。防衛局の測定結果によると、嘉手納基地内の沖縄市側で騒音発生は2万1514回で、前年度比284回の増。W値は92.7（前年91.4）だった。嘉手納町嘉手納では1万283回（151回増）でW値72（同72.1）。

一方、嘉手納町が08年度に測定した屋良地区は、騒音発生が3万9357回（前年度比6808回増）。W値は82.3。嘉手納地域では2万3074回（同4288回増）でW値は77.5だった。

米軍再編に伴う嘉手納基地での訓練移転の効果が見られないとの指摘に真部局長は「嘉手納からの移転訓練の期間内に外来機の活動は、配慮できないか米側に申し入れ、騒音の軽減を図っていきたい」と話した。防衛局は併せて普天間飛行場の騒音状況を公表。最も騒音発生が多かった宜野湾市新城で9002回（前年度比1266回減）で、W値は79.3（前年は80）だった。

● 4月24日

米空軍嘉手納基地報道部は24日、同基地に一時配備していた米空軍最新鋭のF22戦闘機が、所属先の米バージニア州ラングレー空軍基地に帰還する際に他の基地を経由したことを明らかにした。経路は明言していないが、現地報道によるとハワイのヒッカム空軍基地に着陸した。他基地経路による未明離陸回避を実証した格好だが、同報道部は「将来も早朝（未明）離陸が必要となる場合はあり得る」としている。

嘉手納基地に一時配備したF22の12機は19、20の両日、未明離陸を回避し、各6機が午前6時すぎに離陸した。

沖縄防衛局は24日夜、普天間飛行場代替施設建設に伴う環境影響評価（アセスメント）準備書の住民説明会を名護市辺野古の辺野古交流プラザで開催した。今回でアセス法と県条例で義務付けられている住民説明会は終了した。防衛局は久志区行政委員の「防衛局は施設完成後の施設間の飛行ルート把握しているのか」との質問に「ルートを把握しておらず、米側に住宅地上空を避けるよう伝えている」と従来の説明に終始した。塩害を不安視する質問には「護岸の高さは海面から8.8メートルを想定している」と明らかにし「護岸から集落まで1キロ以上あり、塩害はないと思う」と答えた。また「集落に航空機の排ガスが流れ込まないか」との懸念には「検討では二酸化窒素の量は工事着手前より増えるが、環境基準の10分の1以下におさまると考えている」と述べ、健康、生活環境への悪影響はないとの見方を示した。米兵による事件・事故への懸念にも「できるだけないようにしたい」と答えるにとどまった。会場には住民130人を含む230人が参加した。

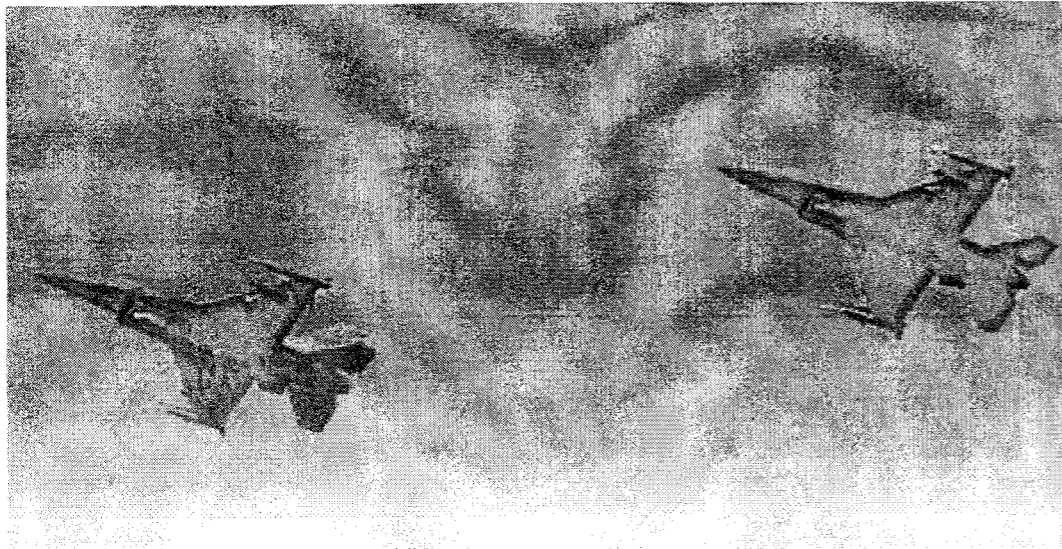
● 4月26日

名護市辺野古区（大城康昌区長）の区民大会が26日、同区交流プラザで開かれ、大城区長から普天間飛行場代替施設建設に関し、同区が名護市や県、防衛省に要請した地域振興策について市側の回答が報告された。市の回答は、大会前に開かれた同区行政委員会です承された。同区は、08年10月28日付で市に対して生活環境の維持や補償金など12項目を要請した。市から今月23日に（1）軍用地の分収割合は市と辺野古区で町村合併時の条件である6対4を堅持（2）新たに発生する収入は地域振興補助金交付要綱を参考に措置する（3）新たな収入が発生するまでに区が実施した事業は市の「再編交付金基金」で助成する（4）覚書は国、県、市、辺野古区と要望等の調整が整った後に交わすの4点について回答があった。覚書について大城区長は「時期は未定」と述べるにとどめたが、同区と市、県、国が進めている6者協議会の設置以降になるとの見方を示した。

● 4月27日

嘉手納基地に一時配備されていた米空軍最新鋭のF22戦闘機が20日早朝米本土に帰還してから27日で1週間が経過した。地元の騒音軽減の期待に反し、同基地ではF15戦闘機の訓練増やFA18戦闘機などの飛来により、帰還後1週間の騒音回数はF22配備時と比べても変化は少なく、騒音が減少する改善は見えない。

浦添市消防本部や沖縄防衛局によると、米軍牧港補給地区（キャンプ・キンザー）内の、国道58号近くの倉庫の污水管から異臭のする液体が漏れ出し、4、5日前から日本人従業員6人が、のどの痛みや顔に湿疹（しっしん）が出るなどの体調不良を訴えていたことが27日、分かった。市消防本部によると午後2時35分ごろ、在沖海兵隊から「建物から異臭がする。何かあった時のために救急車を配備してほしい」と要請があった。現場は城間側のゲートから南に約300メートルほど進んだ場所にある「727」と記された倉庫。沖縄防衛局によると、倉庫周辺には規制線が張られ、同局の職員は近付けなかった。立ち会いは事実上拒否された形となった。米軍側は「米軍独自で調査し、後日報告する」と伝えてきたという。



オーバーヘッドアプローチを行う三沢基地のF16 (09/5/14、リムピース提供)

同局は(1)浮遊した物質名(2)人体に影響を与えるものかーなどについて早急に報告するよう米軍側に申し入れた。全駐労沖縄地区本部によると、従業員の病状は気分が悪くなった程度で病院には搬送されていない。

在沖米海兵隊は「潜在的な危険性を緩和するため、周囲の警戒や避難を実施した。建物内や屋外で空気の検査を実施したが、異常はなかった」としている。

米空軍嘉手納基地所属のHH-60型ヘリコプター1機が27日午後2時45分ごろ、渡名喜島の村管理ヘリポートに緊急着陸した。同機は付近の出砂島(いすなじま)射撃場で訓練していた。村に米軍から連絡はなく、上原昇村長は「許可は出していない」として、沖縄防衛局に事実確認を含め現状を報告した。嘉手納基地によると、燃料システムの不具合で緊急着陸。さらにもう1機が緊急着陸機の修理のために着陸した。

2機は午後6時35分ごろ、ヘリポートから離陸した。ヘリポートは渡名喜集落に近く、急患搬送などに使用している。けが人はなかった。

● 4月30日

沖縄防衛局から県基地対策課に入った情報によると、30日午後2時12分、米軍キャンプ・ハンセン内EOD(廃弾処理場)1付近で山火が発生した。約21時間燃え続け、1日午前11時18分に鎮火した。原因や焼失面積は判明していないが、山のすそ野から尾根にかけ、広範囲に焦げているのが確認できる。27、28日には米軍キャンプ・シュワブでも実弾射撃訓練による山火が起きている。県は30日、沖縄防衛局に電話で「今週で3回目の山火事。県民は不安を感じている」として、早期消火と再発防止を米側に求めるよう申し入れた。

● 5月2日

2日午前11時55分ごろ、米軍キャンプ・ハンセン内レンジ3付近で山火が発生した。沖縄防衛局によると原因と焼失面積は不明だが、同日は訓練は実施されていなかった。火事は米軍ヘリが消火し同日午後4時55分に鎮火した。

2日午後2時17分ごろ、那覇市の米軍那覇軍港に、米海軍第7艦隊のジョン・バード司令官らに乗せたヘリコプターSH60一機が着陸したのが確認された。着陸の際、市街地を低空飛行した。うるま市の米軍

ホワイトビーチの第7艦隊旗艦ブルーリッジから飛来した。第7艦隊報道部によると、軍港への着陸は軍港に停泊している兵員輸送の高速艇視察のため。

県内の米軍施設の目的などを定めた日米合同委員会施設分科委員会覚書、いわゆる「5・15メモ」では、同軍港の使用主目的は「港湾施設および貯油所」となっている。第7艦隊報道部は取材に対し、軍港内にヘリポートがあると説明した。県基地対策課の又吉進課長は、米軍ヘリ的那覇軍港使用について「好ましくない。市街地に近く、事前に説明があるべきだ」と不快感を表した。同ヘリは第7艦隊旗艦のブルーリッジに搭載されている。

● 5月7日

米海兵隊の09米会計年度航空機配備計画で、次期主力輸送機の垂直離着陸機MV22オスプレイを米軍普天間飛行場に12年10月から配備する予定であることが分かった。一方、沖縄に頻りに飛来する米海兵隊岩国基地(山口県)所属のFA18戦闘攻撃機の後継機として、次世代のF35B統合打撃戦闘機16機を16年10月以降配備させることも盛り込んだ。オスプレイの普天間配備は、従来の計画でも12年からの開始を示していた。日本政府が具体的な配備計画は承知していないと繰り返す中、あらためて同機の配備が既定路線であることを裏付けた格好だ。F35は米英で共同開発しており、F22と同様レーダーに探知されにくいステルス性能を備えた「第5世代戦闘機」と呼ばれる。空軍用のA型、垂直離着陸が可能な海兵隊用のB型、艦載型の海軍用のC型の3つの派生形があり、垂直離着陸ができるB型は通常のエンジンに加え、上昇用のファンを機体中央部に内蔵するなど複雑な構造となっている。

オスプレイは13年6月までに配備を完了する予定。普天間飛行場所属のCH46中型輸送ヘリの2飛行中隊計24機と交代させる。オスプレイ沖縄配備をめぐるのは、SACO(日米特別行動委員会)時から、普天間飛行場代替施設への配備が盛り込まれていたが、最終報告で日本側の要請に明記が見送られた。防衛省担当者が配備計画の明言を避ける想定質問を米側と調整していたことも明らかになっている。

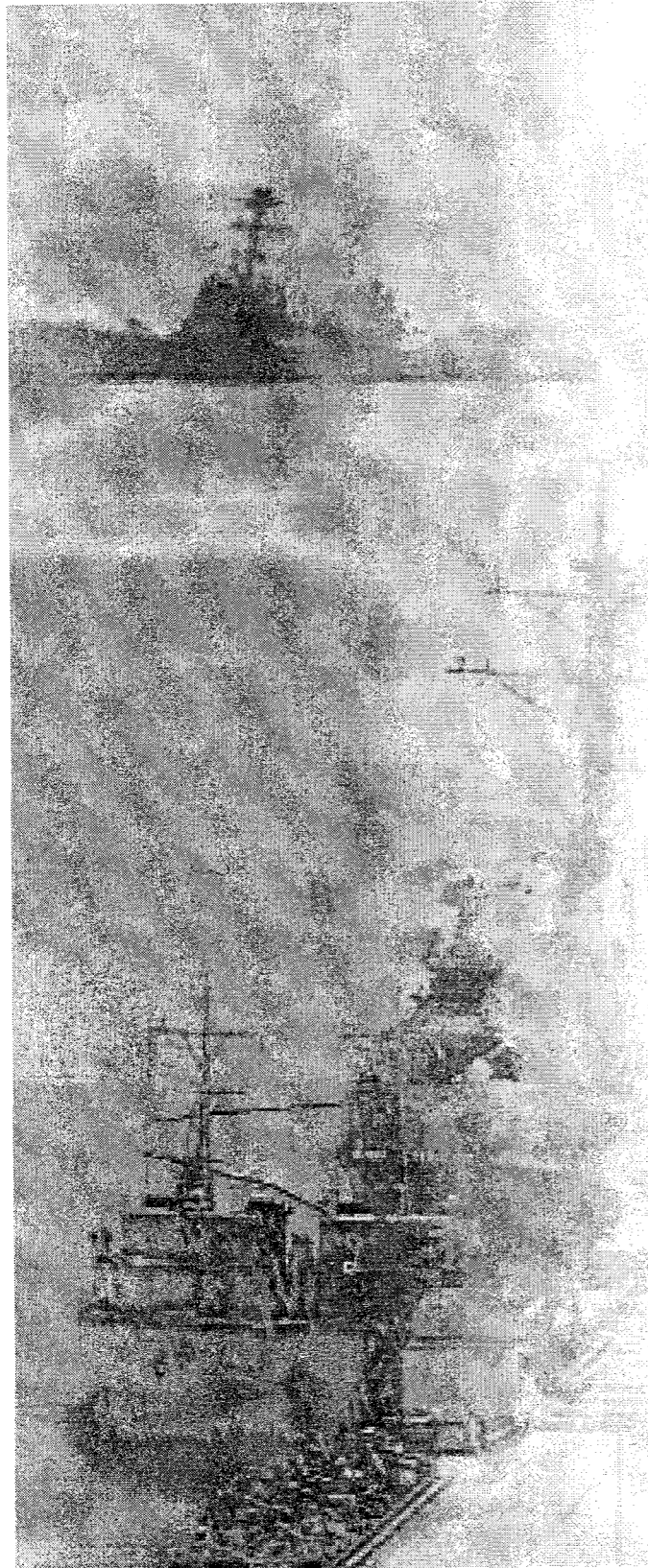
嘉手納基地で7日午前10時ごろ、米軍岩国基地所属のFA18戦闘攻撃機11機が相次いで飛来した。嘉手納町に事前連絡はなかった。1機目が飛来したのは午前10時15分ごろ。その後、30分かけて11機が嘉手納基地に次々と着陸した。11機には同じ飛行隊を示すマークが描かれている。同基地に一時配備されていた米空軍最新鋭のF22戦闘機が帰還して間もない中、同じく外来機のFA18戦闘機の飛来が相次いでいる。

● 5月11日

11日午前7時ごろ、普天間飛行場に米軍の大型長距離輸送機ギャラクシーが飛来した。CH53D大型ヘリ1機が降ろされ、格納庫に搬入された。ギャラクシー飛来は昨年6月以来。

金武町伊芸区の軍用地などを管理する伊芸財産保全会(島袋正治会長)は11日、米軍キャンプ・ハンセン内の軍用地について10年度以降、賃貸借契約を締結しない意向を沖縄防衛局に文書で送付した。同会は同町伊芸被弾事件や度重なる騒音被害に抗議するため、3月22日に開いた総会で契約の拒否を決定。文書の内容は、同会が同基地内に保有する7カ所の軍用地約32万6000平方メートルについて、10年度以降契約しないというもの。軍用地料は年間約4600万円になる。同会は今後、沖縄防衛局からの回答を待つて、正式な話し合いを持つなど対応を考える方針。

同会が契約を拒否するきっかけになった同町伊芸被弾事件について、米軍は4月1日、「最近の訓練とは関係ないとの結論に至った」との見解を発表しているが、県警と米軍で発生日時に食い違いが生じており、現在も捜査が続いている。



米軍北部訓練場の一部返還に伴うヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）建設に反対する東村高江の住民ら14人に対し、沖縄防衛局が妨害禁止の仮処分を申し立てた件で、第3回審尋が11日、那覇地裁（平田直人裁判長）であった。住民側は主張書面を提出し、防衛局側が前回審尋で出した主張で「具体的な妨害行為の特定はなされていない」と指摘した。

住民側は、防衛局側がヘリパッド建設に反対する団体と個人の行動を、同一の活動と位置付けていることを批判。個人の行為はあいまいなままに、インターネットなどで支援を呼び掛ける団体の活動を理由に、個人の「妨害行為」と結び付けるのは不当と主張した。

さらに住民側は、防衛局側がヘリパッド建設に着手できなければ北部訓練場が返還されないという損害が生じるとして、民事保全法に基づき仮処分命令を申し立てたことに反論。事業は政治的な合意で「法的拘束力はない」とした上で「事業の遅れが国に法的損害を生じさせるものではない。保全の必要性はない」と主張した。防衛局側は住民側の現場検証の申し入れに対し、必要性がないと却下を求めた。審尋は6月24日、国側が再主張し、7月27日に住民側が再反論する日程が決まった。

ホワイトビーチに寄港した米水上艦3隻
(09/5/4、リムピース提供)

● 5月13日

沖米海兵隊のグアム移転に伴う日本側の経費負担などを定めたグアム移転協定が13日、国会で承認され、成立した。

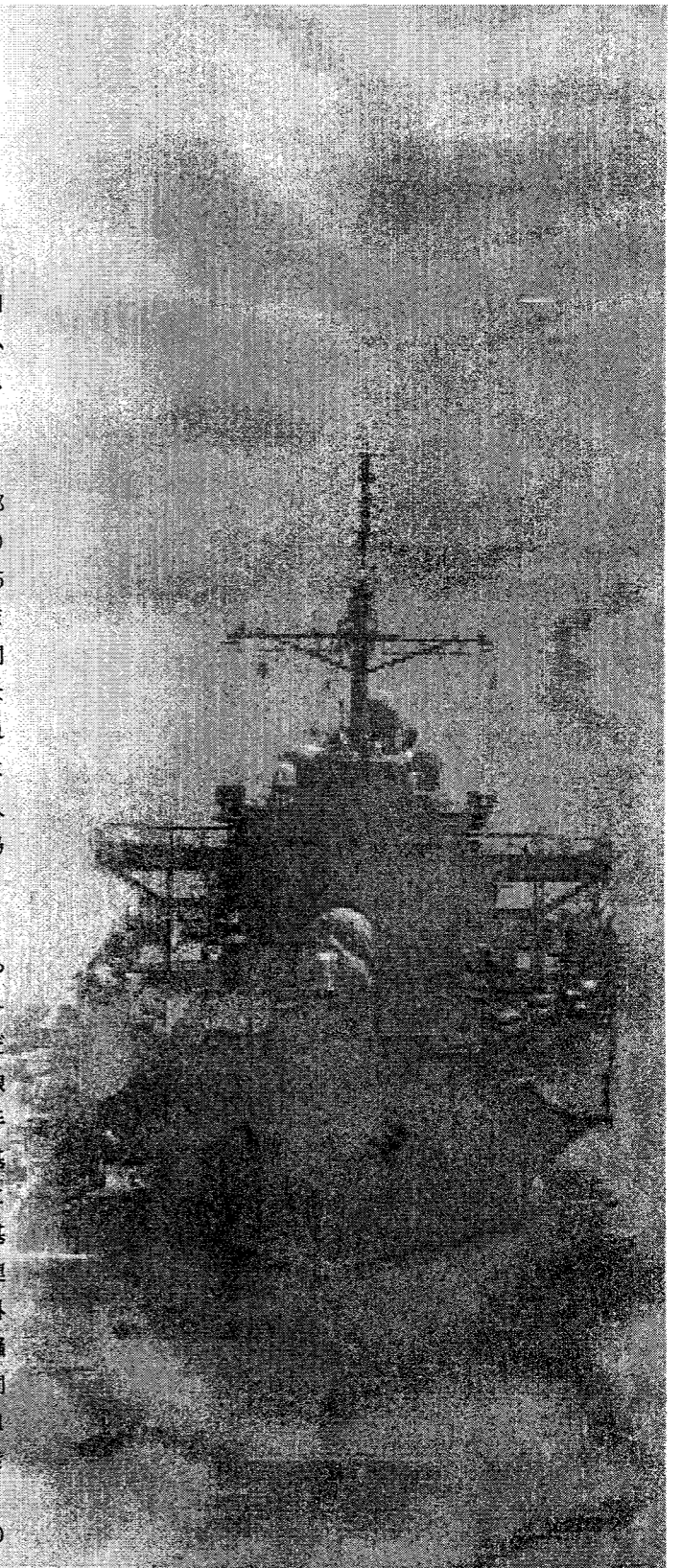
● 5月19日

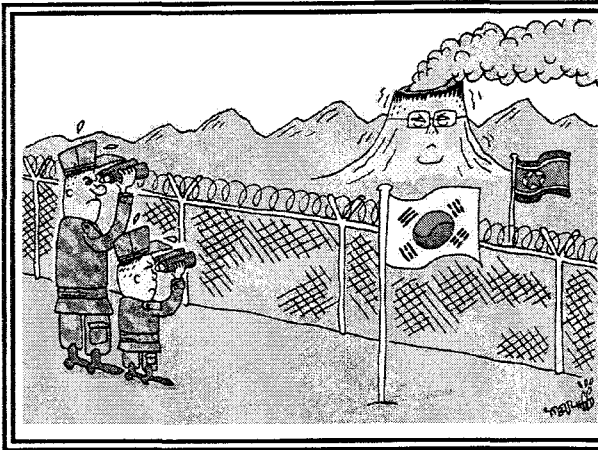
本島中部の10市町村でつくる中部市町村会（会長・儀間光男浦添市長）は19日、沖縄市の同会会議室で5月定例会を開き、沖縄市や、うるま市で基地外に住む米軍人・軍属が飼うアメリカン・ピットブルテリアなどの闘犬が逃げ出したり、捕獲されている件で闘犬の管理を徹底するように在沖米軍四軍調整官に対し申し入れを行うことを決めた。うるま市（島袋俊夫市長）が提案した。

● 5月21日

嘉手納基地で21日、F15戦闘機やFA18戦闘攻撃機などがアフターバーナーを使って相次ぎ離陸。午前中だけで100デシベル（電車通過時の線路わきに相当）を超える騒音が嘉手納町屋良で17回も記録され、同基地周辺は朝から轟音（ごうおん）にさらされた。さらに、在韓米空軍基地所属のF16戦闘機12機が事前連絡もなく飛来した。同町基地渉外課によると、同日午後5時までの騒音発生回数（70デシベル以上）は同町屋良で131回を記録。08年度の1日平均騒音発生回数の108回を大きく上回った。

（みながわ みずゑ）





北朝鮮、核実験実施の真意は…
 核の脅威もさることながら
 そのあまりに幼稚な政治手法には
 ただただ呆れるばかり。
 次は国連脱退？
 かつてのごとくこの国のゆくは…
 歴史は繰り返す！

編集室から

◎北朝鮮の地下核実験実施で、再び「敵基地攻撃能力論」が巻き起こっているようです。近い将来行われる総選挙での政策論議で、いさましい事を言う人が必ず出てくるでしょう。でも、この問題で在日コリアンの人々が味わっているであろう苦い思いは、選挙のどこの場面でも触れられないかと思うとやりきれません。

◎去年の春に庭に植えたイチジク、柿、沙羅、コシアブラ…どれもすっかり根付き葉を茂らせた。我が家のつましいエコ活動だ。「エコ！」を叫ぶ国際社会、だったらどの国も軍事費を減らせ！その金でどれほどたくさんの木が植えられるだろう。

Global Vision !



会計報告 (09.04.21 ~ 09.05.20)

【収入】

1 先月からの繰越	150,306
2 当期の収入	0
(1)会費収入	0
①維持団体	0
②維持個人	0
③参加団体	0
④参加個人	0
⑤通信会員	0
(2)カンパ収入	0
(3)運動収入	0
(4)預金利子・資料収入	0

【支出】

3 当期の支出	43,533
(1)郵送費	25,908
(2)文具・備品	13,705
(3)振込手数料	0
(4)分担金	0
(5)ロッカー代	0
(6)雑費・備品	3,920

【残高】

4 次月への繰越	106,773
----------	---------

月刊「キャッチピース」発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース 編集●キャッチピース編集委員会
 連絡先連絡先●232-0065 横浜市港北区高田東 3-38-15 田巻一彦方 電話・fax ●045-531-1341eMail ●QZT04441@nifty.com
 郵便振替口座●00160-7-136148「キャッチピース」定価●100円 (通信会員年間3,000円)